KODAK Color Control Patches
© The Tiffen Company, 2000
Kodak
LICENSED PRODUCT
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black
Inches
Centimetres

僧4
775
256

# 古今著聞集序

夫著聞集者宇縣亞相巧語之遺類江家都督清談之餘波也余稟芳福之種胤顧璪杖之樗質而琵琶者賢師之所傳也儻辨六律六呂之調圖畫者愚性之所好也自養一日一吹之心於戲春鶯之囀花下秋鴈之吁月前暗感幽曲之易和風流之隨地勢品物之叶天為悉憶彩筆之可寫繇茲或伴伶客潛樂治世之雅音或詑畫工略呈振古之勝槩蓋居多暇景以降閑度祖年之故摭勘此兩端搜索其庶事註緝為三十篇編次二十卷名曰古今著聞集頗雖為狂簡聊又兼實錄不敢窺漢家經史之中有世風人俗之製矣只今知日域古今之際有街談巷說之諺焉猶愧淺見寡聞之疎越偏招博識宏達之盧胡努不出蝸廬謬比鳴寶于時建長六年應鐘中旬散木士橋南衣愁課小童粮叙大較而已

# 古今著聞集惣目錄


巻一 神祇 才一
同 公事 才四
巻六 管絃舞 才七
巻八 孝行恩 才十
同 弓矢 才十三
巻十一 畫像 才十六
同 偷盗 才十九
巻十四 抄説 才廿二
巻十六 無言者 才廿五
巻十八 飲食 才廿八
巻二 釈教 才二
巻四 文学 才五
巻七 能書 才八
同 好色 才十一
巻十 写藝 才十四
同 蹴鞠 才十七
巻十三 祝言 才二十
巻十五 宿執 才廿三
巻十七 恠異 才廿六
巻十九 草木 才廿九
巻三 政道治治 才三
巻五 和哥 才六
同 術道 才九
巻九 武勇 才十二
同 相撲強力 才十五
巻十二 精英 才十八
同 哀傷 才廿一
同 闘浄 才廿四
同 変化 才廿七
巻二十 魚虫禽獸 才三十


目録終

予抜書一篇三四五段或通篇不抜一段
毎二丁巻末本書丁數記

序目録畢

# 古今著聞集巻才一

## 神祇才一

内侍不ハむりしハ清涼殿にさゞめをとれまゐらせらるゝ事なりとなの
づからぶれハのこともあらんとそのなれまゐらべしこそ温明殿
にうつさるゝにはなり此事いづるの時のことにかなりしかの
殿清涼殿よりさゞりまゐる役なりしこそ内侍不ハさゞめらるゝ
る才能ハ板殿とたかくしさあらばらしきよりはるとぞ天徳内
裏焼亡に神鏡ゝがかくしいでゝなひくなんでんの様の
木にかくらせゐひとりあるゝをのこゝや殿ひざまづきそ御
目をふさぎてせいひつゝゐくらるへくしたるへのきぬの袖を
ひろぎてうけまつらせらるゝ事なれどもしたりしかしてあ
まいらせ給ひしかつゝ事つゝへく給りされども此事なるべつゝ事なし
其日此御記に云天徳四年九月廿四日申の剋主光朝臣來申云
大気頗消罷立温明殿東北尾上に有鏡面を経八寸鏡有


大正二年一月廿日寄
中村楯雄氏贈

一脈円覲甚以分明、家出術被見上見之者無不驚或作礼かく
のごとく小野宮殿の筆みえてうたがひなかりけり寛弘のころも
うかし風けりけれどもまこともりけるにかはらざりけり
宇治の勅使参向ありて宸筆の宣命にこの由仰られ造り
長久焼亡まで風けるんぜうにかくされなりその御やけ遺
のひさる灰をとりてうるひつ小へなりていまだわりしまれなき
世のくだりさまに神鏡のあさまもそみえつる神威いかにもかなひ
かなりぬるべきなれども世のくだりにさるといふこえしも此かくなり
ゆかねまふまつる今の末いかなるらん分明しざるべきこと
後三条院の御時くふのうつしも御度同じく御ま入れ奥にて遂く入海の
ぞえありけれ宣旨をとりて座にらへ下されけくこのみなさま
つかうせらもねよし逆鱗ありけるに社のおもりの末一つかに
されよりけり主上きこしめしれさうたかをでなぐさめやされけれど
本もとのおくにかえりけり後まも入海せざりけり

元永元年四月九日顕通大納言忠とんの嫡男にて出石勅使にて
かられけるに此きての節とやまく宸筆の宣命給らばおしした
きれけりけりいそぎ人を返しく奉らせられけれど日次よろしからぬ
てや今日はまたの大相国其時右大将にておはしけるがその筆跡
ぎよしく家つかくふしさものなりとぞ宣ひける保安三年四月
廿三日小大納言になりけれども四月より心よわくぞ又のた
とどまらしたて八日よりなかりけるかくの如く中して八
ぎりぬの中院右大臣雅定中将にて給はりその家とぞはつかれける
康保二年二月十一日中納言兼仲四日右大将の兼まで従二位とゆるされ
ける後任大将右大臣同官乗もえせよかくりつけ時
時出仕あれかれども同日より出仕ありけるに故右大臣
大炊御門の殿にわたりしましつかくへて同年八月十七日
同従二位とゆるされけれども於下臈之由寛二年閏十月廿二日
大臣のつねでまたよ大納言に任ぜさりけるもうしみたり

惡せば永万元年八月十七日大納言成辞して正二位にゆるさるゝ
ぶらべくまんと願ひて加階の間めづらしかれ共実仲卿あえんへ
のゝひかくて思ひたれけるとぞうくして志づまれ物ゝ成
世の人なしこゝあえりけりゝひたびく高成座つしてひたりまゝ
社に詣く勇の行き所ゝひ宣ばさしに祈請をしけるなどを若
こゝや俄にかんなるに御宣をさきの大納言を召出しゆひける
成志ばしはまとしかうばしゝひたく程立かへ直ちまゝりけれ共ふぎ
如志ましとも仰れたまへるそ出されまけり物相の栄むを捨て君に
つかへんなる程をべかゝば思ひなげく本なりれと仰られけれど信仰の成
とのごひ親兵のゝひをなして下向をしられまけりまゝ詣の秀
句も多く世元を傳中に

罷官未忘九重目　五恨將遂二夜長一

かそふれは八とせへにまきりあはれけり治しことを時ると得ぬ
これらを世て世の人いとぐなしこゝあへるなりなしかくて年月

をふる程に治承元年三月六日妙音院のおとゞ内大臣まそかりまし
きらぐ大臣よのぼりを給ひて小松のおとゞ大納言の左大臣まそ仰
せるが内大臣よのぼりを遣せ給ふ小大納言にかへりあつて六月六日
内大臣程なく大臣を辞しゆされけれどさりとも此朝まはとのこ
ゆりけれ共いつくさなりて月日の過ぬれど此望こゝ如此せど
いかく傳に詣給ひ此の中に乾を立られけるに十月廿日
つゐに左大臣よなられまけり其夜の御宣もゆひ合ふ遣いけ
く傳れ宿願も報ゝ事そ此ひのひける同三年三月晦日にけく傳に
来るとて出られまけり大納言実国卿中納言実家卿などともなひ
御せるとぞ此日中の御門左府も来り給ひり三条左大臣入道その時
大納言なり六条の大臣の中将にて仰りけるもおりしせる伸べ
ゆされけり此度れなりまゝ中将の傳の宣あるまそ右平氏此曲を
まはれけるが面白かりけるなり

二条宰相雅経卿は笑成大明神社利生にて加あがりしる人之なのかこ

世中あ物しくそゑくしくしてうしくしく敷るゝともねがふれバ
彼ら化の治政に宿しておれより当代にくゐうにも照すも後代
（末をつとめとしてありまに於よみ給りき
世中に数多くぬ者丸友千高廣くそまされかとの川邊に
さ古より今にいたるまで世にちはし給ふ者ぞ北野の
社司　安楽寺が菅原の大政の神ぞれバすさまじそれかねすしむ者まよみ
さるとのいとかしこき事を見しそれより驚く
納められし雅経のよみて給ひけるこの御覧ありて いかばかり
徳行の心もありけるまて後宇多にありて二位宰相まで
のぼりて給ひぬるをうつりて大政の神の利生
仁安三年四月廿一日当家にて御の参りに伴ひ左衛門尉氏
人なき神事もせで仁王講どれにすひろるに依りしの大將子に
りえ幷く社の来臨けりり大炊御門室町すりそのこすりハ民ア
ハ光左卿の家之神事にて給りれバ火うつ移ぎりけるわたるべき事也

古今著聞集巻之一終　但シ此刊本紙数二十七枚　古今著聞集巻第二
釈教第二　古今著聞集巻之二終　紙数四十四枚　今一冊ニ出しめた

# 古今著聞集巻第三

## 政道忠臣　第三

治世之政百法廉絶是則君以仁使臣臣以忠事君者也
若君臣合体上下和睦者也
延喜聖主位に即かせ給ひしまして後北野右大臣菅原道真公
李太白に於て雄勢の人をも忘れアで碩学をもそれかりぬ
たしとて寛平法皇在中ちり給ひとある見し給しごとくせ
られ給へんどすれば神気花正成と乾坤開くる所ぞく
延喜の御代の御別当にかしてまのかに詠て風月の興
菅原丸北をりて寝殿も給べるを延喜の天神の徳下まく
おりしましきかときいさめまれりれでこそ御りまなりり　寛平の
遊川かと春風秋月若菜に実集一章に神家小野に因説に風月に且調文武

不可二年再幸二又大熱大寒情況と作り村上御不事度等あ
りきるに法司の下部の年とけたるが南階の邊に作りたる紙を見
当時の政治をバ世にハいくゆすと作り給ひたれど因此変はとてそ
ゆゑ但嚴察に格明為へは率分雲に草作と奏しけれハ
御門大きにそぢ居しをしてけりさせる云事の日にハおらざりけるを
格明のいかとゆハ云事の程に入ゆるそ作り率分雲に草の志げまる
とハ法国のこれぎ地の事ゆゑ申かへしいみじくゆゑりけるものへ
昔ハ人の業もなへくとしてぞ居たるされど研究の大納言に先
代の時命分袍備献など書れたんなるハ良長の袍とて御のくとある
物の人にもなどがなるとぞ後朱雀院の御所旬に集りけるを
を作して次日資房の家人なるを見て時云事の業に作り
ぞしかバ此事に他大に知まりかくてハ世のつゐへ形なべしいかゞせん
ぞると右衛門宣賢に見しへひあハすべしとみことのりあられど初ゆ
されられどかとぐゆ給ひけるもこれの云事にはまし給ひて畏りゆ

さぞされがふきを大臣作せしきかりかりそると申たんだ人もなをり給
なんとハかゝひゆされけれどそのさぐめに扱ふて右府咲つ
して畏のよしをせられけれど人こゝなゆれそれこゝ情来の寸法す
べらまきり
後三条院御時陰方が後左中弁にて作りけるを聊て実政を左中弁
にかされまりあしたに陰方陰猶つとめて以けれど陰猶にもえ沖
うせおりしゆきぐりけりそぢさせあひけるにてそ同院律令式格
にたがひ給と宣命にかゝせ給ひせきるを奥仲にあれより後とてそ
ゆさせ高いめ和にすぞにたがひたるを此紙ハいぞかくハゆさせ
給ぞと制しまゐらせけるに祖なくうせさせおりしましけるハその宣
命のゆへにやとぞ人ゆゑ為輔中納言に作りかれて作るハ人ハ屏
風のやうなるべきを屏風いふ所ハ思ひきのへつれバとふてなりひ
ぐ紙にりてとられどたふるなし人のあるりにうかりくなり
ぬまじバえ為とうだ屏風のやうにひぐあ所限りなれど実うかり

ミ奏(モトヒカナ)とゆるされけるを許されたまへとうしかれば頼ひ入道殿
とりなし申されけるに左右なく叡慮にかなひて法皇去年
のころより御悩重く後白河(ごこうら)入道もなく殿下ひとへになげかせ給ひし建久も
三年春入道の法衣にて行かはりて太政大臣不ゝすくさせ給ひし
申されけるが上皇まで入給ひもとの御殿をはなれさせ給ひけるとぞ
其後程なく十月八日より法皇の御悩もおもくならせ給ひ同十六日入滅
もひせんの心より御崩御せさせ給ひけり

## 公事 第四

朔(さく)の元会より除の追儺(ついな)にいたるまで公事の礼一にあらずかれこれ多(た)ひ
さるべき後にしるされたる儀式臨時の大小事朝家記小山野を
まつり其儀式小そむ事より小松大九条殿の古流は御所実(こじつ)そのかゝり
めでたく行はれし儀式の故はあやまり給へし今は絶たる事(ざいよ)もあきらかにて勤めさせ給ふ
家流々の雲(くも)の上にかたり年中行事つかさどる諸(しょ)の職掌に記し給ふなる儀式さよし
とも申されければ後世まで残(のこ)し給ふなり 殊に古来のならひを知る事なり(ちょくわ)

古今著聞集巻之三終

# 古今著聞集巻第四

## 文学 第五

伏羲(ふつき)氏の天下に王として始めて書契(しょけい)を作りて縄(なわ)を結ぶ政(まつりごと)にかはりしより文籍(ぶんせき)おこれり孔丘(こうきう)の仁義礼智信をおしへとして
道をひろめ書を五経とし六芸をつたへて人にまなばしむ文(ぶん)をたつとび道を弘(こう)め風(ふう)をうつし俗をかへよとて
文(ぶん)の徳を習ひ学ぶ事はなし文学の用(よう)ゐる事はかりなしこれより以来(このかた)本朝にも神武天皇より十七年
に百済(くだら)より博士(はかせ)王仁(わに)経典(きやうでん)をもちて来りてよりこのかた後漢(ごかん)史記を習へり
をひつきより抄詩(せうし)は志(こゝろざし)のゆく所なりあらはれて志となり言にあらはれて
ともにこゝに天武天皇の御子大津の皇子はじめて詩賦(しふ)をつくり
給ふそれよりのち花鳥(くわてう)風月のおもむき皆(みな)詩賦の心をのべ
詞花言葉の鞭翻(へんほん)也悉(ことごとく)綱繍(きんしう)の文を裁(さい)す物(もの)なり

コノステガナ
チガウ
フウヲヒロメ
ゾククヲミチビ
クハブンヨリタ
ツトキハナシ
オシヘヲシキ
タミヲオシエ
ルハガクヨリ
ヨキハナシト
ヨムベシ

之暦府胡綱文所に作れて白氏文集第一詩えらびてをるへきよし
勅定ゑられハ

能文好飲老蕭郎
生計枹来詩是業
江従巴峡初成字
不醉黔中争得公

送蕭處士遊黔南
身似浮雲鬢似霜
家園忘却酒為郷
猿過巫陽始断腸
摩圍山月正蒼々

此の四韻ハ此ことにえらびあてまゐりたり第一句あられたるハ
有られど四句解ことなりてありがたきなりや古人同心
のなど無ある事之
あ事ハ作文席ハ相親が書ける小王子晉之昇仙後人立祠於候
嶺之月羊大將之早世行客墜波挽峴山之雲此の句ことにすぐ
れたりけるを後に月のあらはれたりけるにあ事ハ亦衣の人詠じ
たるハ天神在歳のあゆりあらはれ給ひけるや
蒼波路遠雲子里白鷺山深鳥一夢此句ハ橘亦轉が考句にて

侍りけれ脊紀之人入唐の時まゐ紀なりと称しけり但雲子里と侍を
旅千里とあらせ鳥一夢をハ出一夢とあらはしたりけるハ
唐人きくて佳句よく作るとそらくハ雲子里鳥一夢と作らバよう
り取ましとぞいひけるさしもの上人のいはれたりと紀ぞとされ
けるにかゝの事ハ有つかれし
前途程遠馳思於鴈山之夕雲後會期遥霑纓於鴻胪之曉淚と
後江相公が書たるを渤海の人感波をそぐしけるのちに本韻人ハ
あひて江相公三公の位にのぼれりやと問けり志ならざるは苦にれバ
日本国ハ漢戈をもちぬ汾国にハあらざりけるとぞたぢしめせる
故に秀行を得に来りて三千世界眼前に栗じ行く下句ハ
ひとづらひ侍りけるにその夜の夢に夜夢天十二因縁心の裏にと
つきさせのひけるなんごとなきと聞り
いづれの年に天下に夜高をやりしけるに或人の夢に文所宗の家の
まへ紀をそつしぎ成君神ともこれ相して三級りせる紀あるは何と

形くいよく指杉以ぞ添ゆまし給る同席云社稷之臣改化雖高朝闕
万機未必充姫雀風月之主戈名雖富夜臺一掩未必類祖宗
彼蕭蕭暮雨花尽巫女之嫋々秋風人下伍子之廟古今相隔
幽奇推同匡房五稔之秩已滿待春漸艤兮江湖舟併覲之
期難知何日復列廟門之籍とかまもしきりきりまいらく蒼
茫雲雨知吾否其奈那内於帝京とあらん作ゆましてり此席以
詠しける時この中の句以此度のうたに人の詠ぎるこの心の中をえれは
うたびそく神威のあまりに天神此詠此をはるまでと人々中はる
今年都督秩満のこしにあたまり明長内洛をんまるを以神も名
ごりを得く覚しめしてかく愒此をはるや同四年都督をてに花洛
まなもむくとて此の宴に集りて席以かれはる小夏の中に人来て
告はるは此席の中にあやまりをはしてしと云と見てさめぬを後
件の席以深思をはるに柳中に景気暮花前に欣欲罷と云句あ
り柳中は秋の半之去の時にあらばと見えして別を以されまはり同

席に潘江法海去之又去也暗川巴字之名洛妃漢如夢而非夏也
自動魏年之塵堯如廟荒春竹深一掬之波徐君墓古秋懸三尺之
霜右軍既醉蘭臺之席梢巻尤驟頻顧桃浦之駕欲内かやうに秀
句たに半出されたりはるに当府のぬくめでさせ給にはるまでて詠せ
らるゝ時此度の戸形りたりはるを満座の府友僚友一人も詠られ
花とぞなりそのこゝ思雷のごとくに形ん作りはる此は嘉承二年又都
督にそなりたりはるこれも神の法斗にしてかしこしかそさるを
尚書舎は唐の舎昌五年三月廿一日白平乙履道坊にしてそこに見て
たこなひはるひはる家形にて貞観十九年三月十八日大納云年名は
小野山庄にしてそこに見てたこれはれはり又本和二年三月十三日大納
云五郷は栗田口山庄にしてたこれはれはるを後天承元年三月廿
二日大納云宗忠は白河山庄にしてこ被行はり七更并之吉為鹿
年八十三 本庄寺結茂原基俊七十六 前の日向当中原廣俊七十 亭主七十
武戸土浦茂原敷光卿 六十九 右大弁実光六十三 武戸少浦茂原時登 六十二

後人而異事雖似偏頗代天而授官職懸運命など述
懷の詞代半すぐせるまゝよりて法家の思ひ入人之代思ふ所を
千房書籍亡ひて似て中院御事せさせ給ひるに代この法ひとりもの
法師子時筒雲象治藤以下もて来るを法師して主稱が中文をハ元
出さるやと法師ありける時の人こゝいとしき事まぞやはる
古今著聞集巻之四終　殺十枚
古今著聞集巻第五

和歌　第六

東三条院皇太后宮とかけり時七月七日極子あるせさせ給ひり
お輔内侍お相の日りと左右れ以てあまたれ女房をわられ
けりうすものゝふたあゐかさのかさみきたるわしハ四人なでしこ
のまだ角きて法おま角いれ事とゝ風流さ角ぐなん給ひるな
でしこ本作りまゐ
なでしこのなふ名ん給ひよりして以まりすゝんひこ角しの宮

時のまゝふ手と云へとも方ゝ角かしまるゝなでしこのそれ
まる角をしたちまる御ゝまれる
相しらぬ志物をふゆる所しの所ハよもひをきみまゝ拾つるそる
海陽のつかふむさしの所墨まあしでかそめひ給ひる
此家ゝやりきそもしらんなでしこのそれのまゝハ文のまされる
むしゝ給ひなりて
松雲の志きりふ志の中ある無我かきあるまゝなりけり
右のなでしこのませふきいかりまるいと語るのそれか給つけ給ひる
万代まゝるともあるぬ文なれやり角かきなかなでしこの花
まる角のあるあるれ之法てまゝく
ここなりけれとみきし法ぬれハ秋まていろをふくみへなり
久しくも白ふへきれ秋なれと桜とこなりのむといひ御く
七夕角つりまゝりけるなあり其る角のさ給ふまゝつくまそ
ちさりけんいそなぐれまゝりけるのきそをさちふまゝここなりのそれ

思られたるんまよみさうらハ集るどよ入ることんなりてと侍なるべきと
思ひていかゞ思ひたりけん花室のなとゞよやそめてけり相りひのとく
まやなりけん此方は来たるせよりをれどもとゞいみしく衰よなりし
まけりさそかひぐしく多載集よ入まけりぬしたゞの加賀とぞ
いひける能因から海藤を似たりけるや
和泉式部はこのかれぐよ加ける此大布祢よ詣てたるをそ
るのこゝろ給ふべく
このなりへし況のなりたるも家方よりあくかれいつかむかとそ見る
とよめりけれど此社の内よ思ふ所なまて
れく山よ多きりて多つ海洲津の見ちるいりものかなりひそ
千志ましありけるとぞ
同式部が女小式部内侍この世なしばすづらひけり限よなりて人
の散るども見しらぬ程よ成てぬしたりけれバいつゝ式部をさらう
にそひぬてひたるぬ程なきへく泣けるよ目をまいかよ見あけく

三ノ字脱

母がかれ給ひけるくやうそていきのしたれ
いかにせんけへきかたもなりなきて親よさ給ふしたらねど
とよかりそてたるを思ふまていひけれハ天竹のうへよあくびさしてや
あらんと母相母ゆるおもまくあらく衰とひひくぐり母方のあたく
うさをさめてよろしくなりて家り
江挙周禅の住さりて後病をもかりけり住吉に法師なりけ
よし給ひ女ゝ母宗源の場へ 大隅守源明国 女或順女さく
かたらんといのる命ハをしらしてさそもわられんとそかれしき
とよみそくらよ書く後社よ生たりけれハ千枚の夏よ白髪の
老羽ありく志の帯をとらしとゝ見えく病のえぬ
多相法師の女房よ小大進といふ方よみおけるが待賢門院の所
方よ法衣一重うせたりけるを相ひく小弟よおりて条文かきて
御りしまけるよ三日といふよ神水をうちこ用しけれど検非
遠使これよ通ける失やあるへきいてゆへとやける給小大進泣く

乃作讃焉其詞

和訶之仙受性于天其戈卓尓其餘森然
三十一字調花露鮮四百餘歲來葉風傳
斯道宗近我朝前賢温而無滓鑽之弥堅
鳳毛美京麟角猶專既謂独歩誰敢比肩

なのくとあらしの浦の鶴きりに鳴かれゆくまなしそれはふ
此讃兼日は敦光卿ト語ひて和歌作那仲卿ト清書志ひ曾
敦の前に机紙をそく版一坏菓子やうくの奥書ニ紙すへらり但
そのにてつゝりて実物ニハあらしは前本ニ既後敦卿ト賀寺那浦卿ト
和歌作那仲卿ト大学及敦光卿ト少納言宗忠前和歌道經安藤寺
為忠ニ次に答信紙を也次相ト初献詩人ニ鶴鳴れ盃小桃子と
もちて簀子殿に作ひり亭主那書ハ初献ハ和歌の
宗道語とめらるべし 清書一同志ハ後敦卿ト座をとらせ
敦卿ニ書ひ那浦盃をとりて人丸のおに至道經小桃子紙

とりて盃に入て机のうへにおく各座にかへりつきて勅盃あり二献
の程に或ハ浦行盛来ひらる右中将雅定卿ト又来ひ也り亭
主の云先人丸の讃紙を書へきなり人々不存不同亭主於讃を
おに講ぜべきよしやされはれば机のまへに文書を置く各座を
しく件讃を白唐紙二枚に書ひ右衛門又来ひる讃をひら
きて文書に置て此紙を講ぜらる次に和歌紙を敦云水風
晩来敦光卿ト朗詠紙いたす新書文云次に亭主同人紙出
又作詠せし也云保胤云々堂明石浦の鶴也次敦光卿ト
詠ひて云々多胤兄弟不見夜数多尓彦人無に入て各後
今紙給しけり

夏日於三条内作 大匠水閣詠水風晩来

和訶一首并序 大学以敦光

我朝風俗和訶為本生於志形於言記一変詠一物誠為
諭之端長者君臣之美是以将作大匠毎属親天之餘閑

凝詞露於六義叶黄心者花鳥草虫之逸興應右招者
香秋細馬之羣芙今日會遇只是一揆方今流水當夏
岑冷風迎芳來蓮紫戴以淒々渚煙漸暗秋標動以颯
々沙月初明情感不盡鄉而詠吟其詞曰

風ふけは浪とや秋のしらぬらん見きはしきなつ此夕くれ
於撰下大史敬家詠水風晩來和歌

修理大夫敬季

夕陰くよむすふ河をなれとも志賀の浦風すしかりけり

右兵衛督実行

桂ぬきや夕浪しのぶ風ぬけてきれ秋といふれのこ池

内蔵以去実

夕されは河風さてしあのしよ浪なしねとも秋やたのらん

右馬頭雅忠

桂なりあれしの河を風吹くは夕くれそ浪さやかしの

右近中将雅定

夕陰くれなまはなりけよ風吹きあしは下紫そ浪よあらはく

源俊頼

夕日さしゆられかくみかひもなくなきをなかけしそ浪

中務権大輔敬輔

まされより秋はつくれけ風はさしれくれ志ひ無しまね

藤位道理

手ふむすふさしれくれの海しあのふなりとさしくなりそふく

武戸小輔紀威

あのあやをふさくは風の夕月よ浪のしのなら衣うされん

藤位敬仲

夕されはなりけこの川成ふそ風のさしきまそ秋とまさしまね

小納言家忠

苔河の水より名やのふさくれきしも浪をすしらりせれ

季弘幼帥永範

（予為三代之侍讀一廻之旬之類齢位昇三品今別記叡聞故有此句矣）

右衛府之更始歟

ひそかにおもう此の幼の人のまことの武勇の故実

故後大江維光

年ごろてみさうひかふそにものひ

名文を当朝にのこすの五部を

集せしめ（ら）れ（ん）ことを請（こ）ふ（ひ）て義連（よしつら）梶取（かとり）の条時を失（うしな）ふ（は）ざる

此野面の坂長光の時（とき）艮（うしとら）の風（かぜ）弱（よわ）の尼（あま）を人（ひと）そ

より文武一致（いっち）の気（き）しるし云（いふ）和気（わけ）

てはこと（ば）とも勇（いさみ）の風（かぜ）弱（よわ）くなりて

や入（いり）ぬらんと仕人（つかうまつるひと）たゆまつく人（ひと）もなけれ

てはとその文武（ぶんぶ）相（あい）兼（かね）そうる（べ）き

のまく一定相待（さだめまつ）のみそ（と）

落（おち）ん（む）よ（と）かれ（と）

指（さし）ひく扇（あふぎ）一首の

為（ため）ともの義（ぎ）のあまさ

かく（と）て義連（よしつら）ふ（と）判（はん）くり（と）て尼（あま）ふ（と）

家（いへ）判（はん）くり（と）て尼（あま）よ（と）

の中（うち）下（くだ）れ（り）ば（と）

後（のち）文（ふみ）武（たけ）の尼（あま）件（くだん）の尼（あま）が女（むすめ）この扇（あふぎ）の下（した）文（ふみ）武（たけ）

年号月日（ねんごうがっぴ）のさ（と）も（と）

女（むすめ）しまう（と）件（くだん）府（ふ）梭（ひ）脊（のせ）

門（かど）入（いり）

小栗宮（おぐりのみや）

のそ（と）

落（おち）ん（む）よ（と）かれ（と）

指（さし）ひく扇（あふぎ）一首の

為（ため）ともの義（ぎ）のあまさ

かく（と）て義連（よしつら）ふ（と）判（はん）くり（と）て尼（あま）ふ（と）

家（いへ）判（はん）くり（と）て尼（あま）よ（と）

の中（うち）下（くだ）れ（り）ば（と）

後（のち）文（ふみ）武（たけ）の尼（あま）件（くだん）の尼（あま）が女（むすめ）この扇（あふぎ）の下（した）文（ふみ）武（たけ）

年号月日（ねんごうがっぴ）のさ（と）も（と）

女（むすめ）しまう（と）件（くだん）府（ふ）梭（ひ）脊（のせ）

門（かど）入（いり）

小栗宮（おぐりのみや）

於ぜして玄象をもたしく弾かりもなかりけり此所ハ従四位荻田にあり
てきむしとてこひけれバ杭然と鳴て朝より夕にいたるまでたえ
ぬひゞき絶えず行る所なく一面の琴を二つにわりてありける所ハ文覚が
別所にいたりて文覚をえりて筝をとりて後徳の横笛とて笛を以て
おもひかくして秀づぜ弦をせる物之文より内弦をきぢずき弦を
論せる諸家しなり天人来と八幡大菩薩の横笛をひし大童子ま
ことそいひつたへける抄物八幡雅三位の琴弦なくとさぐく来向
して拝しけり御手にふよく数寄さる故なり
白河院御時新院筆頭ひきたまひてありける初秋の中宮のかつさぬる
かし院の御ありける時まりたまひける筝の琵琶がみ行けるハ此音のさ
まにて御かたへの人ハ実えいひつれと申けれ人つて十番にけれハ家筆ハ
いかにもきりしとさし筆琵琶かくの二つの手を弾けるなりとぞ聞せられ
ける
古今著聞集巻之六終

四十丁

古今著聞集巻第七

能書 第八

尺牘の書疏ハ千里の面目なりといへり孔安国ハ蝌蚪の文字をかたどりと
いふ人ハ蒙恬が鹿毛の筆をえりてより一字の石
碑をしるしに万代の形見とならバもよく乃藝能の
中にも能書とすぐれたり
むかし佐理大弐ハその手をほめられける道にかよひて伴よの三蹟の名
誉ありて此の社の額かきてありけるも同じころなり
弘法大師ハ筆をとりてよくよく仁和の額に名をうみて
一国にも書家の家紙かきたりけるに筆の相好とも中なると
名ふしきなることなり

術道 第九

術道一つはあらはれその徳さまざまなり推古天皇十年百済国より
暦本天文地理方術の書を奉りてよりさきそ深くひろまる

ゆるがある歟房のあたりまたくずさくおくまありとしたるまん
とてあふぎのかなめ紙なりしてつかひけれバ女房きこそなりふよし
便宜あしき事やありけん何となきやうまそつぎ子の内まそ
ゆりせますたくむしのねまとうちなりめたりけれどおとこ
ゆてあふぎ紙つかひやうてだり
かし角し形もせまきたくむしの様まされたふなかく地紙ニ成
このあふぎなるべし何とこも女も傳まありきりまや

古今著聞集第六之八終　丁数三十

古今著聞集第六之九

武勇　第十二

伝　此篇一条も ふ板

武者禁慕戢兵保大定功賞和衆豊城是武士德也照
職之場去犯於一寸ニ振曜礫之勇貽名於万代無隨也
昔藤三郎ハ人心ひかけまつらせたりけるに四村見紙を取物置
まなし給ひく勇ちかくけれバ此官のさそ過去の時紙物ける
程まお物に置て有紙程作す四位してのかん時紙物に中物
まなり大物にあらく勇をとるれなりうざりけれど逆居ようざ
りけりとぞ申侍て給る又西河院御代を造のごとくに聞きても無
勢なりしましたりしが樹武者紙にそく見ゆませなくしゆきぐりけり
伝事ありけるハ小一条院ハ世のをこの人にてあけるが粮義勇をとる
こぞとたりけるがきわめくうるせくなぼゆるへ今ハ見れが侍道ハとそ
宮鶴ドまハ伝事なりけれさもあらん武士を人をばかのこてもさ
なりしまきべきなりとぞ九条の大相國の二条院へ申給ひける

ふ二鹿愛百仲古し上手多ハ傳ヲ芳蓋

粉光翔下の帝ホ雲武が注者麗光の物有なり雲武第一の手きく
まそさげたりをもたづさぬ射なる物之なり仲の注者雲武よいひ
なりハさげたりハ弦射給ふ先は男が二臣中のさそかちたんをいえ
射給ひしといひなる弦雲武やすらぬるいふ臣のかなと思ひて
あるがひてぞり弦射たづしぬる物なるハ汝が同しく思ひん物弦
不思に思ひたがひくあらふ臣しと定めてかのれハいかれといへバ先ハ
命弦あらはるうへハといへどさいたれたりそれにとて云とうへ
ぞき曾いひつるがどく三臣のきて云たり雲武たづまましき物
弦注者一人うしなひたんぞるなハ換なれともき弦なれどと思ひて
よく引てたるちせりはれバ左の眼の志も五寸中の程くたづれ
まきれバ雲武まけさく約束のまゝにやうくの物左ことすいふま
思ひがひくれつき度今一度射給べしといふ臣すからぬまゝに
又あらふ雲武初めこそふしきまくたづしたれ此度ハより

ともと思ひくしぞし引さあちて志中まあてたるちなるに右脇
下弦又五寸中の程てたづしぬ此時とこれバそ中ハ元射
給ふ間じきとハ手きこふそハかりすれたんだせのかれたる人の
為ふと云といふ先定めて一人まハ立ぬ之それをまゝ中をさして
曾ひつるをとゝきてそとそそ人間とるまゝ五寸ハのく之志れバ
かく物之ゝやうの物弦ハそ用ことを志てこそ射給ひめといひ
はれど雲武注まをれくいふ事なりけり
一説有物ハまいさせかりし間しけり此みさごは下ま出きそ此
の矢弦ハなりある日光を射させんと思ひて武名ハまゝ此
と云ふ物なるに折ふしむつるがはなり石の弦ひくあらはる
此ハみさごの射て取ゆくの矢弦ハ射とどむ臣し此射ふさん
事ハ二鳥もこつさぬ矢をもたつさしと思ひ是あひたるひ
そはうまつるべしと物定ありはれどいるみ中へきまれて例ハ
主くこ矢弦ハれく知りたりせり矢ハかりまゝ出てぞ得りける

[illegible]

古今著聞集卷之九終 凡数十八枚

古今著聞集卷第十

馬藝 第十四

神事の度まゐは競馬とし云るの御まゐ其馬数娘と云志
のこゝろなるべし或説には年始てさ爾ぐのる藝をゆくさる又
信濃の新任して左右の牽まゐ給く礼儀をそ形へらるゝとそ
以藝を家風の和歌也 治承の新宮也
小侍所左右右馬まくはりしける所 信濃国方 [illegible]一度まゐ給

ける治承元年三月四日左右馬所を成給ける爾南北にまゐなれはり和歌の会
くせもなきこゝろ成 [illegible] 国方を智の表を呼出して
ゆかりは今和国方定てくせ物に家給へんずんと此者の会人に良成
主聞して給らんぞうに会のこゝろ成 往まつらんるなるげさ思ふすしを
ゆかれば和とぐこゝろにまゐ祝の和にてあるにとし不思の事もあるべし云和爾
たしかりぬべし後くのやうなるべきにはしに給らは此れば国方ゆきまゐてゆかれは
芸所る信く給らば西方 [illegible] 給て以爾を給べし糧を
物に家らるすしくまゐ爾長にまゐすあやふ此人成なるべしと思ひて中
かれば和とぐ力及ひてあがりる成ひれまゐり爾みちふくち成を問させ
くあげける成に遠矢なしおとぐ威にまゐ成 [illegible] 遠矢也
後西河院の所 [illegible] 成 [illegible] 下 [illegible] 教を [illegible]
所まゐる爾をまして家らまゐる給 [illegible] 事なりしかれば [illegible]
に新をまゐふまゐびら斗を [illegible] 家にまゐ爾
給らのかぐ [illegible] 爾つりまゐれば [illegible] 行くまゐり [illegible] 爾 [illegible]

[illegible]

逃鉤 中十七

逃鉤の逃げ去る前兆を性視の如くなれども、自然之上緑樹に景二六、判凍殿翼却面感感

與那覇考之

古今著聞集巻之十一終　文安天曆大寶元年より以與

古今著聞集巻中十二

博奕 中十八

天武天皇十四年天皇御宴大官大殿酒酣之時

その時の物を御しめしなりけれども寛幸を始とまかりなりけれども

さ半まかりて小野人じりし賭碁のうちこの双六のさいをもちゐる人もそなへ

のみにて碁のしさ人もそなへ有りしかども賭碁

のるはあるべからずとぞ

延喜年中の比宮中にて右衛門督藤原公任卿と碁をうちけ

せられけるに唐絵の屏風を賭碁にうちけり

[illegible]

まて圍碁をうちけるに棋子を入れけるとぞいひける

偷盗 中十九

盗賊を刑罰に法度東行深く法令暗来浮世に満盛

[illegible]

[illegible]

人にあらずして後にひとしきにあらずとぞ

和宮の御名席(つかじよ)かけり

あはれるが君の御代なが月の　こぬかと明るいひてのこれる　さく
みなりんまさくれぬべき　秋をわしこれ給んとて月乃　かつらのこれる
長の御はすり　御ふ様よそひてけしとりを　めして夕月夜山会
の心の風とり　ゆくあの大井の川急ふみやき　し給へば今さの君まは
さるび　きる雲も明くみやきをさふらひ　なぶ深あはそおよまごれる
ちり　明くてかるんんにまたうるへると　みとのうして御ふことは秋
のあふうひてなるゝ木葉と　あやまれ秋の山殿んにぞとり　ひ月
明き御とかけて紅葉の柴のあしまちるとてのらぬ　雨と雲え
きくの花のきしは　のあれる秋方なるかしとかどろ　きこれの鶴川急ふ
さちて雲の　かるうとうぶれ夕の横心のうひまるれく人のなるぞ
我かとししまびのうり雲ぢよまどひ　巳れとみしあそ嫌うもめ
水は　すこて人はなれる入江の雲　いくせ(ぬしん)といふことをよ
ゆせ　ふゆふれるみじかさあるれ　このとりれとは雨とひつ

れなき　まのまふく風の君まこれ　まの雲の霧ことも波ぬ
岩　浴とまれよろあぼしきんぞ　さち久深あのとのも世の末
まぞのこり今秋芳給へく　のちれはふ秋きん命さのこぐ
なんとりかへしきのぶのくさの　志のぞざらめや

三政大臣　貞治公

小倉ひもみちのいろもあらあらいまてひのこゆさまとなん

躬恒

さひしらまましらなきそ足引の心のひあるはすやあらぬ
此行年の年紀弁　可能にて年ゆく　おほ行なるなるまでしるへし
古今著聞の集巻第十九

古今著聞の集巻第十九

宿執　廿三十二

宿執者天性之所深著也　矢武以下諸難蔑棄其道思其名之者
祇治老能奇指人名有癖不能歌罷足文形象之今御歌

闘争 廿六七

闘争之紀曰、自小及大、邪遇曹闘、雄多少遇挑致、有血氣者、有争心ハ
彼忿小忿、以致大禍、不可忽焉、欲無先譲間、以後忍誡何ぞや
かゝるによりて、右府將軍家の時、和田左衛門尉よりありける時
の平六義村と、ひとつの座上にありけるに
千葉介の子胤綱、そのころいまだ若者なりけるが、多くの
人を越えて座上せられける、義村が胤綱にむかひて
くちおしくおもひけるにや、いさゝか気色ありて、下総犬ハ臥所をしらぬ
ぞといひければ、胤綱すこしも気色かはらずして、三浦の犬ハ友を
くらふなりと云ひけり、和田義盛が合戦の時の事をおもひて
いへるなり、ゆゝしくぞかへしけるとぞ

古今著聞集巻之十五 二十四丁
古今著聞集巻第十六
興言利口 廿五又

興言利口は、若放遊得境之時、談話成、虚言当座殊有興を
語者也

ある人の[illegible]のむかし[illegible]中納言家綱のもとに[illegible]ありて
すみけるが[illegible]いまだ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

古今著聞集巻第十九

草木 第廿九

草木者有時以昔伊弉諾伊弉冊尊既生草木祖句句廼馳

次生草野姫[illegible]於戯春有桜梅桃李之花秋有紅葉黄菊之[illegible]

[illegible]

[illegible]

進之

水邊萬蒲

千年五月

[illegible]

大江爲長

[illegible]

進

上

水邊萬蒲

千年

五

五日

大江爲武

[illegible]

先久於故宅

廢難於久年

廉康於住取

無主又有花

[illegible]

二十一枚

魚虫禽獸

[illegible]

禽獸異生其稟且千皆雖不能言各以有不思者也

[illegible]

文集詩云
水居五篇記取致身材与不材間
文集詩云
在水岡不材之修
暗自宇ノ之木材取諸己
今日庭前之花何勲於人

老米ノ判
早稲大庵 本書物紙数但除五百七十一枚

文二春二月二七日

中村直樹